



目 次

I はじめに	1
本園研究主題設定の理由	1

II 本園の研究主題と『科学する心』との関わり	2
-------------------------	---

III 本園ならではの自然環境を更に生かすために	2
--------------------------	---

IV 実践事例	3
---------	---

夢中になる遊びのどこが楽しいんだ？＜雪国札幌編＞

1 氷が消えた	【3歳児 2019年11月】	3
2 あのツルツル氷が欲しい！	【3歳児 2020年1月28日～2月下旬】	4
3 青い大きい氷を作りたい	【4歳児 2021年2月9日～10日】	5
4 3月の泥んこ遊び	【4歳児 2021年3月10日】	5
5 雪ってこんな形、こんな音がする	【5歳児 2020年11月9日】	7
6 ソリ滑りの山を作りたい	【5歳児 2020年11月10日】	7
7 足がブレーキになる	【5歳児 2021年2月25日】	8
8 ソリレース	【5歳児 2021年3月8日】	9
9 林に暮らす鳥との出会い	【5歳児 2021年3月8日】	11

僕たちみんな虫博士！

～偶然興味が重なったコミュニケーションの難しい子どもたち～	14
-------------------------------	----

V 今後に向けて	19
----------	----

VI おわりに	20
---------	----

I. はじめに

本園は令和元年度より『やってみないとわからない!心と体で感じよう!』という研究主題の元、実践を通して必要な環境や教師の援助の在り方について探ってきた。1年目は、夢中になって遊ぶ子どもを育む教師の役割について探り、2年目は、～夢中になって遊ぶ子どもを育む環境との出会い～を副主題として研究を進め、今年度は研究の3年目となった。



昨年度は、コロナ禍の中、休園の時間を有効活用し、夢中になれる自然遊びの環境構成について教材研究を行い、環境改善を行った。オタマジャクシの卵採集をはじめとする自然散策・自然遊びの研修、園の林でロープワークの研修、幼稚園の泥場・砂場で教師自身が遊ぶ研修などを行った。そのことで、幼児の視点に立った夢中になって遊ぶ感覚『ワクワク』を教師が直接体験でき、更に『ワクワク』するためにどのような環境があると良いか、幼児が何に『ワクワク』しているかなど、どの会話が日常的に交わされるようになった。教師自身が『ワクワク』することに取り組む姿に刺激を受けた幼児は「先生も楽しそう」「こんなことをやってもいいんだ」等と遊び方が広がり、進んで見て、触れて、感じて、考えること、出会った感動や喜びを伝え合うことなど「夢中になって遊ぶ姿」が増えた。

また、進んで林の環境を生かして遊ぼうとする幼児が増えたことも成果と言える。新たな環境との出会いから生まれた『幼児自身の気付き・思い・楽しんでいること』を丁寧に探り、環境の再構成をすることで『遊びの中で子どもたちが自らつかみ取った』と思えるような援助や環境構成となり、その後の自信や遊びへの意欲、深い学びにつながることを確認した。



一方で、きっかけを作り一歩踏み出したまではいいが、継続してじっくり遊ぶ姿や、自ら遊びを作り出すこと、新たなことに挑戦することなどには躊躇する姿も依然見受けられることから、今年度は

『本当にその子のやりたいことは何か』を様々な角度から捉え、遊びの中の『深い学び』を追求していきたいと考え、研究テーマを

新たに作った泥場に水をためて遊ぶ子どもたち。
「浮かびたい」という幼児の思いをキャッチし、
冬のソリを側に置いておくと遊びが広がった。

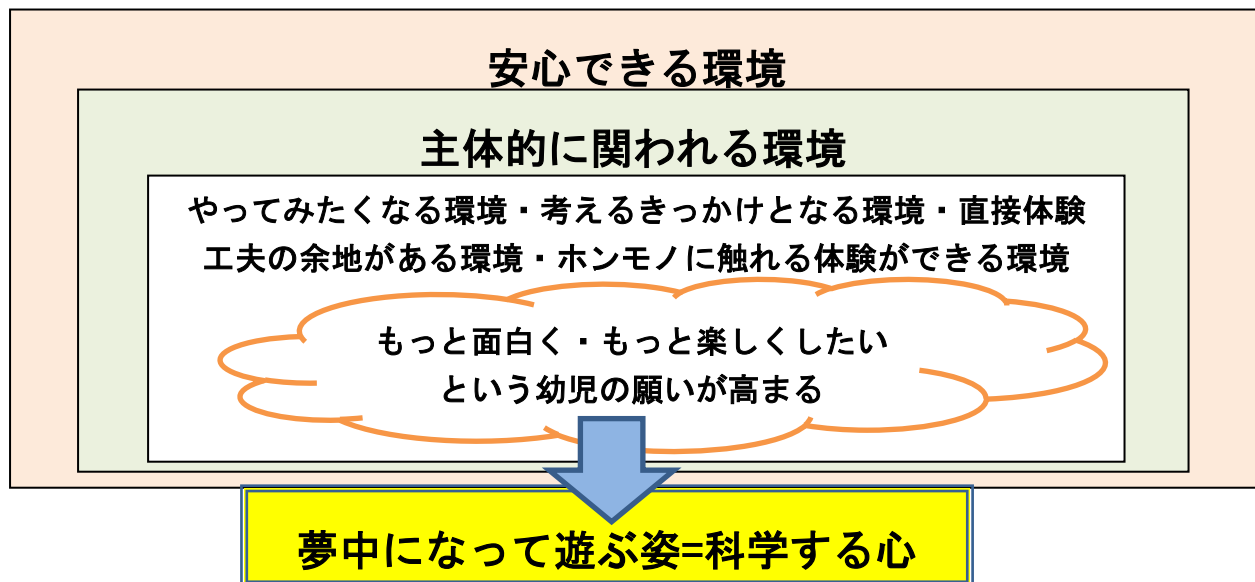
『やってみないとわからない!心と体で感じよう!』

～夢中になる遊びの「どこが楽しいんだ?」から見えてくる深い学び～」

とし、研究を進めることとした。

Ⅱ 本園の研究主題と『科学する心』との関わり

本園における『夢中になって遊ぶ姿』は、安心して気持ちを開放し、主体的に環境に関わり、『もっと面白く、もっと楽しく』したいと願う幼児の気持ちの高まりにより遊びや学びが深まる状況を指し、そのことは『科学する心』の豊かな感性と創造性の芽生えを育む保育の実現であると考える。(前年度本園論文引用)



『本園研究主題』と『科学する心』との結びつきが深いことから、今年度も研究論文を応募し、本園の研究の深化と外部への発信に努めることとした。

Ⅲ 本園ならではの自然環境を更に生かすために

本園には隣接した自然林がある。現在、子どもたちは毎日林で遊びたがり、よほどの悪天候や強風でない限り林を開けない日はない。ブルーシートの屋根が点在し、木の枝で組んだ小屋が立ち並ぶ様子は、ちょっとした村のようだ。蚊などの虫が多い状態にもすっかり慣れ、ブランコや、ハンモックに乗って目をつむりうっとり過ごす子どもたちもいるほどだ。しかし、8年前は、薄暗く虫が多い林を怖がる幼児も多く、今のように使われていなかった。その年、当時の園長が札幌市の管財に掛け合い林を借用したことで、保育のために自由に環境を残したり、木を切るなど直接関わったりすることができるようになった。そこから林を活用する保育が大きく動き出した。このことから分かるのは、『自然環境がある』だけではダメだということだ。子どもたちが自然に関わり直接体験をするためには「ワクワクする」何かがそこにあることを感じ取る必要がある。

また、私たちの暮らす札幌は11月から3月までは雪の中での生活となる。雪が積もると玄関前の除雪作業や交通渋滞、水道凍結、寒さ、歩きにくさなど大人たちにとっては大変な季節である。しかし、幼児には雪とたっぷり触れ合う経験を通して、冬にしかできない楽しい遊びがあることを感じて欲しいと願う。札幌で暮らす幼児だからこそ、雪と親しむことは大切にしたい。

そこで今年度の研究は、本園ならではの自然環境を生かした実践、および、本園における冬の遊びの『夢中になって遊ぶ』姿から「どこが楽しいんだ？」ということに焦点を絞り事例研究を進めることとした。

Ⅲ. 実践事例

夢中になる遊びのどこが楽しいんだ? <雪国札幌の冬編>

<教師の願い・意図的な関わり・環境 夢中になる幼児の姿>

札幌は 11 月にもなると夜は氷点下になる日が増え、3 月位までは雪と氷の世界となる。幼児は氷が大好きで毎年のように氷を集めたり作ったりしたが、幼児が氷の遊びを繰り返し楽しむ中で、何を楽しみ、何を感じ、どのようなことを学びとっているのか。その時担任はどのような関わりをしてきたのか、写真や映像の記録を追って探ることとした。

1. 氷が消えた 【3 歳児 2019 年 11 月】

北海道の 11 月は気温がぐっと下がり、初霜、初氷が張る、チラチラと雪が降ることもあるなど、秋から冬への変化が目で見えて、肌で感じて分かる季節である。教師は保護者に、「季節の移り変わりを感じながら戸外遊びが楽しめるように、真冬と同じ温かい恰好で登園させてほしい」とお願いしている。初氷で砂場の水たまりや田んぼに大きな氷ができると子どもたちは大喜びで、この日もすぐに外に飛び出し 氷集めが始まった。集めた氷を家に持ち帰ると言って箱やペットボトルに入れる 子がいた。教師は気づきや発見がきつとあることを予想し、それとなく濡れても大丈夫な場所に置くようにとだけ勧め、様子を伺っていると…



12 月も戸外で氷集めは続き「氷をとっておきたい」と言うので、戸外に残しておける場を作った。数日するとまた寒さが緩み、溶けて水になり、また寒さで凍ることを繰り返す。「先生!今日は溶けた!」「今日は固まった!」の他、砂や葉っぱが氷の中に閉じ込められて固まったり、お玉と氷がくっついたりするたびに、子どもたちは驚きを担任に伝え、担任が面白い様を見て、他の幼児も興味をもって集まってくることを繰り返した。「面白いから皆にも見せてあげようか!」と教師から提案すると、「見せたいものがある」と降園前のひと時が氷の発表会になる ことも。戸外が雪で覆いつくされる 12 月の中頃までこの遊びは続いた。



2. あのツルツル氷が欲しい！ 【3 歳児 2020 年 1 月 28 日～2 月下旬】

氷探しが好きな幼児が、年長児が作った『ツルツルで大きな氷』を発見！年少児が「これほしい！」と言うので「こだま(年長)組に聞いてみよう！」と誘い一緒に聞きに行った。年長児が「バケツに水と雪を入れたらできるよ」と教えてくれすぐに「先生！作ろう！」ということになった。水を入れたバケツに雪を入れると 白かった雪に水が浸み込み「色が変わった!!」と夢中になって何度も雪を入れる。雪が多くなると固くなることに気が付き教師や友達にその発見を伝える。「外に置いておいたらもっと固くなるんじゃない?と言うので、出口の横の戸外に並べて置いておくことにした。

「ツルツルかな？」
手袋を脱いで直接
触れて確かめる。

先生もっと水入れて！

色変わってきた！もっと雪を
入れてみよう！



翌日戸外に出てすぐバケツを見つけた子どもたちが、固く氷になったのを確かめると、教師に喜んで知らせてきた。残しておきたいと言う要望に応えるとともに、新たに作りたい子には、作った幼児に教えてもらうよう促し、バケツに水を入れたものを渡した。たくさんのバケツが出口付近に並ぶことになった。毎日自分の氷を確かめる姿が2月下旬まで続いた。



【3歳児にとって『氷』のどこが楽しいんだ？】

園庭の氷に3歳児が出会ってまずよく見かけるのが『氷を割る』姿。割った『氷を集める』姿。ガラスのように鋭く割れるけれど、危ないととがめられることもない。ビー玉のように透明で美しいのに、自分の物にできる。「たくさん欲しい」「持って帰りたい」そんな3歳児の思いに応えるに足る素材であることが3歳児にとっての氷の魅力ではないか？

〈3歳児エピソード1.2より考察〉

- ・幼児の宝物との出会いを大切に受け止め価値づける教師の関わりが、その後も興味をもって関わり続ける姿につながる。幼児が感じていること、これから正に感じるであろうこと、偶然出会う驚きや発見などに教師も思いを寄せ、可能な限り幼児のやりたいように試せる環境を作る、よく見ることが出来る場所に残す、たっぷりと時間を保障するなどし、その場限りでなく、見通しをもちながらその後の変化への気付きを受け止めたり、幼児の思いが実現したりするように関わるのが大切である。
- ・「面白い」「不思議」「綺麗！」など幼児が出会った感覚を即座に受け止める教師とのやりとりを、周りの幼児は見聞きしていることが分かる。それらの発見を教師や友達が面白がるのが、さらにその幼児やそれを聞いた友達のアンテナを広げていく。3歳児は個々が感じていることを教師が受け止め、それとなく周囲に広げていく関わりが大切である。

3. 青い大きい氷を作りたい 【4 歳児 2021 年 2 月 9 日～10 日】

自分で作った色水を戸外に出して凍らせて宝物作りをしている年長児に刺激を受けて、年中組でもサインペンで色水を作っては凍らせる遊びが 1 月から始まった。この日、色雪遊び用にタライに用意しておいた青い色水を A 児がバケツにたっぷり入れて「大きい青い氷作りたいから残しておいて」と言ったので、園庭への出口の横にとっておくことにした。翌日登園してすぐカチカチに凍っているのを確かめ、氷を出そうとバケツをひっくり返すが出てこない。



ひっくり返しても
出ない



叩いても踏んでも
蹴っても出ない



水入れてみたら
どうかな？



やっと出た!!
綺麗綺麗!



この間 15 分。その後「水かけたい」と言いに来たので、保育室の水道まで長靴で入れるようにマットを敷き、自分たちで水を汲めるようにし見守った。その後 2 人は大喜びで担任を呼びに来た。そして氷の中で色水が固まらずに残り動く様を「先生やっと出た。時計みたいで綺麗綺麗!!」と知らせてきた。そう言うと、再びバケツの中に氷を戻し「残しておくから」と言って、元あった場所に氷を置いて満足げに違う遊びを始めた。

【4 歳児にとっての『氷』のどこが楽しいんだ？】

4 歳児は「氷を作りたい」「色を付けたい」「もっと大きな氷にしたい」など、氷そのものの魅力に自分たちが関与していくことを期待しているのが分かる。4 歳児なりに試したり工夫したりするその過程を楽しんでいると考える。出来上がると満足で興味は移り行くことも多いが、以前経験したことを活かしたり、ふと思い出してまた関わるという形で少しずつ継続して関わったりするようになるのも 4 歳児であると考え。

〈4 歳児エピソード 3 より考察〉

・エピソード 3 の 2 人は仲良しだが、お互いに思い通りにしたい気持ちが強く、遊びが続かなくなることが多かった。二人の共通の願いに対し途中であきらめそうになった時には手を貸そうと思いつきながら見守っていた。「水をかければいい」というアイデアはこれまでの生活の経験を目の前の課題に応用し試した姿であり、自分たちで解決できたことが共通の満足感につながった。

4. 3 月の泥んこ遊び 【4 歳児 2021 年 3 月 10 日】

凍てつく冬の日と寒さの緩む日が交互に訪れるこの時期、雪が溶けて柔らかくなった園庭は土が見える範囲



全てが泥場と化す。長い冬が終わるこの時期、札幌の子どもたちの「外で遊びたい」という思いを引き留めることなく、思う存分楽しませたいと思う。保護者にとって泥々になったジャンパーを洗うのはとても大変であることは承知の上で、それでもこの時期に戸外で遊ばせたいことの意図を伝え理解をいただき、必要な準備をお願いしている。寒い日は再び固く締まり氷になり、温かい日(とは言ってもまだ 10 度以下)は柔らかい泥になる。雪山は日に日に小さくなり、土の面積が増えていく。子どもたちは自然と日々の変化や季節の移り変わりを「山小さくなったね」「今日は(温かいから)手袋いらないね」「泥団子作るの懐かしい!」などと伝え合

っている。泥を丸めたハンバークを網やフライパンで焼き、残雪をご飯に見立て、泥をかけて作るカレーライスでレストランごっこが始まる。「工事中です!」とトロトロになった地面を掘り進め、タプタプした泥に長靴が吸い付く感じを面白がっている。雪山周りに雪解け水がたまり、川作りが始まる。園庭の片隅で「ダンゴムシ見つけた!!」という声が響くと一気に気持ちが春に向かう。この時期を戸外で過ごさないのは本当にもったいないと思う。子どもたちのワクワクがこの時期にこそつまっていると思うからだ。



白一色の戸外から、一気に汚れる世界に変化した時、これまでの夏の遊びが問われていると考える。汚すことに抵抗感が薄れ「やりたいようにやっていい」と気持ちが開放されている子どもたちだからこそできる遊びがある。1年ないし2年の幼稚園生活を通して、幼児が自由に夢中になって遊ぶことの意義をどれだけ保護者に伝えられたかが【夢中になって遊ぶ幼児の生活】を支える鍵になっていると考える。

【幼児にとっての『氷』どこが楽しいんだ?】

氷は見た目に美しく、すべすべとした手触り、冷たさ、溶けたり固まったり変化するなど、幼児にとっていろいろな感覚を刺激する魅力的な素材であり、自然と心惹かれる姿があるが、冷蔵庫の氷と違うのは「自分で見つけた」「自分で作った」「自分で自由に扱える」という幼児自身が直接関わった物であるということ。それゆえに宝物になるのだろう。

<3、4歳児エピソード1~4を通しての考察>

- ・ 3歳児後半の1.氷が消えた(偶然の出会い⇒自然発生した氷を持ち帰りたという思いから融解現象に出会い驚きを教師と共有)と、4歳児後半の3.青い大きい氷を作りたい(自ら目的をもって⇒今までの経験を生かして友達と一緒に氷を作る)に幼児の発達の道筋を見ることができた。
- ・ 『氷を残しておきたい』という思いに応えることで様々なことを発見している。氷の融解と気温の関係、氷は水に触れると少しずつ溶ける、外側から凍り内側は後から凍る、氷の中にたくさんの気泡や物が閉じ込められる、滑々とした手触り、触れると溶けてより滑らかになる、光を通すと美しい、氷を叩いた時の音、割れる時の音、氷の重さ冷たさ、など何度も繰り返し触れて発見し伝え合い確かめ合っている。全員が興味を寄せ続けなくても、クラスの誰かが何かを発見すると、自分の氷も確かめたくなる…その積み重ねが『確かめ合う』ということになる。目に付く場所・見合うことを意識した場作りと共に、幼児の発見からの新たな視点の広がりに教師もしっかりとアンテナを張ることが次の環境を作る上で大切なる。
- ・ 冬の長い北海道に暮らす子どもたちには、寒い冬をプラスに捉え、楽しめたいと願っている。幼児は、動く物・変化する物を好み面白がる。そのため、特に季節の移り行く変化の多い時期は、幼児が主体的にそれらに気付き関わりたいという願いと重なる。幼児の願いを実現するには、保護者の理解が欠かせない。保護者にもその意義を伝えることにより、汚して帰ってくることをプラスにとらえる保護者が増えてくる。保護者の前向きな受け止めが、安心して自由に暮らす幼児の幼稚園生活を支えていると考える。



5. 雪ってこんな形、こんな音がする 【5歳児 2020年11月9日】

札幌に初雪が降った。登園後に音をたてて降り出したことに気付くと、テラスの戸を開けて手で小さな雪の粒を集めようとする。激しく降っていたので、どんどん溜まるがあっという間に水滴になる。「すぐに溶けてしまう」と言いながら廃材箱からプリンカップや空き箱を持ってきて集め始めた。「雪ってこんな形なんだ」「光ってる」「やっぱり白いんだ」「箱だとこんなに集めれた」



雪粒の形や色、硬さに興味津々。しかし程無くして水滴となり「あれ、色が変わった」と水に変化する様に驚いていた。また、雪の勢いが強く集めた容器等に雪が激しく当たり音が変化する面白さに気付いた。「パンパンと音がする」「こっちはカンカンっていう」「みんな違う音だわ」。

【5歳児にとって『初雪に出会って』どこが楽しいんだ？】

「雪が降ってきた、冬だ！」とウキウキした気持ちで初雪を集め、雪の形状、色、目の前でじわじわと水になるなどという変化を見て、気付いたこと、感じたことを思い思いに伝え合い、経験から関連付けながら考えたり試したりすることを楽しんでいた。容器の材質による音の違いに気付き、音を予想しながら廃材箱から容器を探し何度も試すが、全部違う音がした。予測できないことへのおもしろさを感じ雪への関心が深まっていった。

6. ソリ滑りの山を作りたい 【5歳児 2020年11月10日】

初雪の翌朝、一晩で1メートルほどの雪が積もっていた。登園後すぐに園庭で雪遊びが始まった。雪玉を作り雪合戦。少しすると男児が5人集まり「ソリで滑る坂を作ろう」とママさんダンブで園庭中の雪を集め始めた。次第に雪の小山ができてきた。すると作りたい山のイメージを話し始めた。

B児「こっちから登ってこっちに滑るから」

C児「ここに雪を集めて」

D児「もっと高くしないとすぐ着いちゃう」

山らしくなってきたのを見て「入れて」と次々に仲間が集まった。

B児「先生も手伝って！大人の力が必要だ」

B児「そろそろ固めるから」とスコップに持ち替え、雪をパン



パンたたき始めた。D児は手で固めた。C児は、山に登って足で踏み固めた。「ソリで固めよう」と言い各々がソリに乗り滑る。小さな山の頂上が不安定だったので、互いにソリをおさえ合い一人ずつ滑りながら斜面を固めていく。次第に山らしくなったのを見て、自分たちですごい物を作ったという自負と、達成感を感じていた。「山がOPENしました」と園庭にいた人にアピールすると、「滑らせて」とたくさん集まってきた。振り返りの時、「みんなが滑ってくれたことが嬉しかった」と発表していた。

【『雪山づくり』のどこが楽しいんだ？】

一晩で園庭一面が真っ白になり、巨大な砂場のようなになる。積もったばかりの雪は幼児でも容易に扱えて、自由に造形できるため、仲間同士でソリの山のイメージを伝え合って思い通りに作ることができた。5歳児になるといつも除雪で大人が使う道具と同じものを、扱うことができる力や操作性が育ち、それを自由に使い自分たちで山を作りソリ滑りができたこと、周りの友達も喜んでくれたことが達成感や満足感となり楽しさにつながっていたのではないだろうか。

7. 足がブレーキになる 【5歳児 2021年2月25日】

冬休み中、職員が園庭の一角に除雪機で雪山を作った。冬休み明け、幼児が米袋に新聞紙を詰めた自分のソリを作り、滑りを楽しんでいた。園庭の山はスロープが短く、年長児には物足りない。そのため「キツツキ公園（園の向かい側にある）でソリ滑りをしたい！」と言い、自分の米袋ソリを持ち公園へ出掛けた。斜面に造成された公園は、雪が積もるとロングスロープが自然に現れる。公園内に立ち木も多く、その林間を滑ることも楽しいようだ。

「スピードがでる！」「足を出したほうが真っ直ぐいく」「え、どうしてなの？」「だって足がブレーキになる」この日は気温が低くサラサラの雪であり、更に私たちが行く前に保育園の子が遊んでいたため踏み固められた後だったので、よく滑った。子ども同士でどうやったら転倒せずに滑り降りられるか伝え合っていた。



「今日はよく滑るから、このままで滑る」とスノーウェアのまま尻滑り始める子、「アザラシ滑りでいく」と腹を雪面に付け頭から滑る子、「つながって滑ろう」と縦並びや、横並びで友達と一緒に滑ることを楽しむ子、「今日は寒いからスピード出るなあ」と気温によってソリがよく滑る日と、あまり滑らない日があると気づき、気温と滑り具合を予測する子などいろいろな滑り方や滑り具合に気付いていた。



【5歳児極寒の『ソリ滑り』のどこが楽しいんだ？】

ソリで坂を滑る遊びは、滑り台のような爽快感を伴い、繰り返し楽しめる。5歳児になると、体幹が強くなり体重も増えるためバランスをとり、転倒せずにスピードに乗って滑れるようになる。ソリをスノーボードに見立てて立ち乗りをしたり、ソリを数台繋げて電車にするなど、自分たちで遊びを考え出し友達と一緒に試す。幼稚園の生活や遊びの中で、ソリのように速いスピードを体感できる遊びは無く、自分の体のいろいろな部分を滑らせ、体を使ってブレーキやスピードコントロールができることが、楽しいのではないだろうか。また、極寒期の札幌は、日中氷点下になる日も多く、その中で遊んでいると、寒い日はスピードが出るなど、気温とスピードは関係があると気付いていた。厚手の防寒装備を着用しているため、雪上で幼児同士が滑り重なっても痛くはない。

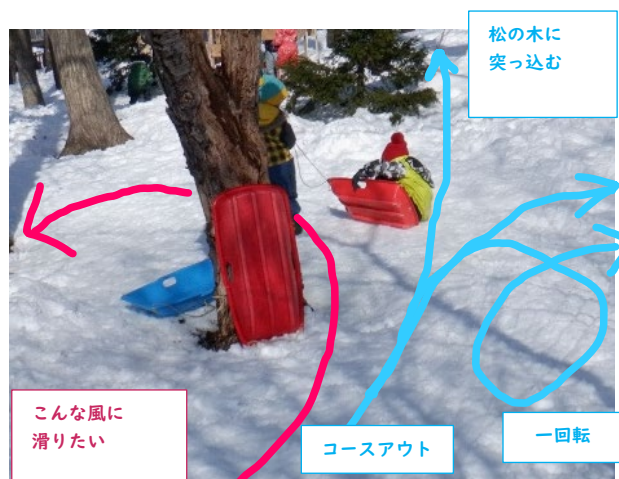
偶然の面白さから始まり、友達同士がわざわざくっ付き合って遊ぶことも楽しくて仕方がないようだった。

8. ソリレース 【5歳児 2021年3月8日】

園庭に隣接する林に入ると、下方へ傾斜し左にカーブする小道が続いている。E児が林の奥にあるソリコースへいく途中、思いついたように「ここから滑れるんじゃない」と小道をソリで滑り始めた。暖かくザラメ状の雪のためスピードはあまり出ない。そのため足で漕ぎながら助走をつけてカーブを曲がりゴールライン（自分で決めた場所）で止まるという遊びを始めた。（E児はカーブを曲がるところがTVゲームの『マリオカート』と重なって見えていた。）いつものように真っ直ぐ滑るのは違い、足でソリを漕ぎながらスピードをつけることとカーブすることに苦戦していた。うまく曲がれずに直進すると、コースから外れE児は何度も松の木に突っ込み止まる。

するとE児の様子を心配して「大丈夫？」「何しているの？」と数名が集まってきた。E児が「マリオカートをやっているけどむずい」「ゲームのように簡単に曲がらないんだ」と訴えた。E児が挑戦していることに自分も参戦し、『難題を共にクリアする』という団結心が芽生えたのか「俺もやる」「やりたい」と挑戦者が増えていった。

教師は面白そうな遊びが始まったとワクワクしながら見守り、カーブに植わる大きな木をガードしながら、林の奥から登ってくる幼児と、滑り降りる幼児が接触しないように交通整理を始めた。



F児「足を（ソリに）入れるとスピードがつく」、G児「足を出してバランスをとると転びにくい」、H児「スタートの時に押してくれ」などと、どうしたらスピードを付け、転ばずに曲がれるか自分の考えを言い始めた。そんな中偶然F児が転ばずにカーブを曲がることができた。みんなが「Fくん、すごいな」「どうやった？」と上手く曲がれたコツを聞こうとする。F児は「体を右に思い切り倒すと左に曲がる！だって、スキーの時もそうやったら曲がったんだ。」冬休みに家庭でスキーを経験していた幼児も多かったので、すぐに「わかった」と体を倒す作戦を次々に試し始めた。しかしすぐにはうまくいかなかった。I児とJ児は体を倒すことを考えすぎてしまい、反対側に曲がる。K児はコースから外れそうになりソリから足を出すと一回転して止まる。それぞれがどうしたらカーブを曲がれるか試行錯誤し始めた。E児が「カーブのところはスピードをゆっくりにしたらいい。」とうまくいった方法を伝えた。K児「曲がるときに右足を出すといい」と言った。しばらくすると、「やった、うまくいった」と次々に曲がることができるようになった。賑やかな声が響き、「GO」というスターター役を始めたり、近くで風船遊びをしていた幼児たちが風船で応援を始めたり、周りで遊ぶ幼児たちも遊びに参加し始めた。

そこへ女兒3人が仲間に入り滑り始めた。女兒たちは2人がソリのひもを引いてカーブを曲がろうと挑戦した。ひもを引く2人とペースがなかなか合わず、何度もコースアウト。「Iちゃんの走るのが早い」と外側を引くL児が言い、ひもを引く2人がスピードを変えていくうちに、乗っているJ児が重心を右に傾けた。うまくカーブを曲がれるようになってきた。それを見てF児が「引っ張ってもらったほうが、スピードがつく」と言い、「俺が引いたらいいかも」と言って、互いに乗り手と引き手を変えた



り、ペアを交換をしたりした。「スタートダッシュを掛けるといい」「曲がった後にひもを持つ手を右手から左手に変えるといい」など、友達が良いという方法を取り入れて互いに試した。乗り手が重心を右に傾け引き手とタイミングが合わないと、乗っている人がソリから投げ出された。「置いていくな！」と叫びみんなで大笑い。滑っているのを見ていたJ児が「Eくん、Fくんのチームはスピードが出て曲がり方が上手い」と言う。それを聞きI児、K児は「あの2人はハヤハヤチームだ！」と仲間の滑りを自分事のように喜んでいた。この日いつまでもこの遊びが続いていた。



翌日またソリレースを始めようとするが、歩くだけで雪がぬかるみ、木の周りが特に解けていて、地面が見えることに楽しさを見付け、ソリではなく穴掘り遊びが始まっていった。

【5歳児3月『ソリレース』遊びのどこが楽しいんだ？】

- ・この遊びが見られたのは、修了式間際の頃で、今まで一緒に生活してきた友達と遊べるのもあと数日となり、友達のつぶやきや姿を気に掛けて、共に過ごす時間を惜しみながら生活していた頃のことである。1人が始めた遊びを見て一緒におもしろがる仲間がいることで、これまでの経験からきっと何か楽しい遊びが始まりそうだと感じていたのだろう。みんなと試行錯誤し遊ぶ中で共通の目的が実現できた時、達成感、満足感が感じられたのだろう。
- ・幼児は慣れ親しんだ林を俯瞰的に見ることでゲームのカーレースをイメージした。しかし、イメージしたスピードを出したまま容易にカーブを曲がるゲームの中の感覚と、実際にソリに乗って曲がる経験とでは大きな違いを感じたようだ。実際にソリを操作する難しさが友達と共有できたことで、一緒に試行錯誤しながらどんどんレベルアップさせて挑戦する遊びを作り、進めることが楽しかったようだ。
- ・年長の3月、何度転倒してもニコニコと諦めない友達の姿に、いつしかみんなが集まり、互いの個性を認め合い友達の考えを受け入れながら、遊びが盛り上がっていった。その一体感に、「心地よい」と「楽しい」だけでなく『いつまでもこのまま遊び続けたい』という夢中になって遊ぶ姿を見た気がする。

〈考察〉

極寒の日に「雪がサラサラしていて雪玉が作れない」「寒いとソリがよく滑る」また暖かな日は、「すぐに大きな雪だるまが作れた」「雪が重たい」「硬い雪玉が作れる」など天気と気温によって雪質が日々違う。幼児は、それを生活の中で感じ自然に雪質を生かした遊びを展開していた。雪は自由に形を作ることができる、変えることができる、想像して遊べる、自然に変化してしまうなど、幼児にとっては興味が尽きないものである。また何をやっても雪が溶ける、雪が降り積もると無かったことのように真っ白になってしまうことも、多様な遊びに発展していく要因だと思う。毎日見ていると、雪の量も変化し、降りたては一面銀世界で、風で雪面に凹凸が描かれ、景色を見ているだけで美しい。雪国札幌に住む私たちにとって雪は貴重な教材であり、環境であると考え。事例の5歳児たちは、進級当初周りの刺激に非常に弱く、自信がなく、自分の思い通りにならないと気持ちを崩すこともあったが、年長の3学期、互いの持ち味が十分に分かり認め合うようになり、雪の中で五感を通して気付く発見や不思議なことは、誰かに伝えたく、友達と一緒に「なんで」「こうかなあ」「もしかしたらこうかも」「やっぱり」とごちゃごちゃ言い合い大笑いしていた。この時期ならではの共同的な遊びの中から対話的で深い学びが滲み出ていると感じた。

9. 林に暮す鳥との出会い 【4歳児 2021年2月】

幼稚園に隣接する林にはたくさんの小鳥たちが暮らしている。しかし、夏場は木の葉に隠れ、鳴き声はするものの幼児が関心を寄せるのはカラスぐらいだった。林の小鳥に気付かせるチャンスを狙い、秋に餌台を設置した。2月は寒さが厳しく戸外に出歩く子も増える時期。一方で2月の林は木の葉も落ち、人気が少ない林は鳥を見つけやすい。秋に設置した鳥の餌台に何も入っていないことに気付いた子が「氷しか入っていないね。鳥ってリンゴとか食べるんだよ」という声を聞き、早速リンゴを置くことにした。

2月5日 林で事件発生!!

りんごを置いたちょうどその翌日、林の木の上から灰色の鳥の羽がフワフワと降ってくるのを教師が目撃した。視線を羽の飛んでくる方に向けると…そこにはカラスの姿が!!その状況を子どもたちに伝え、「事件発生!」「羽はどこ?」と年中組も年長組も大騒ぎに。特に夏に虫をたくさん捕まえて遊んだ子どもたちの関心が一気に鳥に向かいはじめた。

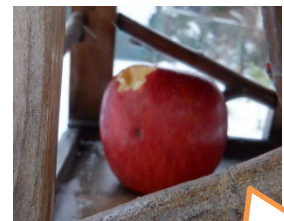
ここにも羽が!
灰色と黒もある…



即席の研究所が開設され、図鑑を持ってきて鳥の羽のページを開き、年長組から虫眼鏡も借りてきて、どの鳥の羽か調べ始めた。



カラスに食べられたのかな?
どの鳥だろう?



りんごも食べられている!!

M児「りんごは誰が食べたんだろう」

N児「カラスはリンゴ嫌いじゃないはず」

O児「カラスは入れないから小っちゃい鳥じゃない?小さいから入りやすいんだよ。」

P児「りんご減ってるね。トマトも食べるかな?」

子どもたちの会話から餌台にきた鳥が何を食べるかに興味をもった様子。弁当に入っていたミニトマトやリンゴ、ジュース、野鳥の餌などを置くと 翌日食べた形跡を見つけて大喜びした。



2月8日～

鳥の観察が楽しくなるように双眼鏡を用意。

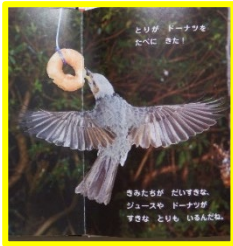
『とりをよぼう!』という絵本や鳥の図鑑を設置。絵本を真似て餌箱を作り自分のお弁当に入っているオカズをほんの少しずつ入れて設置し、食べたかどうか確かめに行く子が増えた。



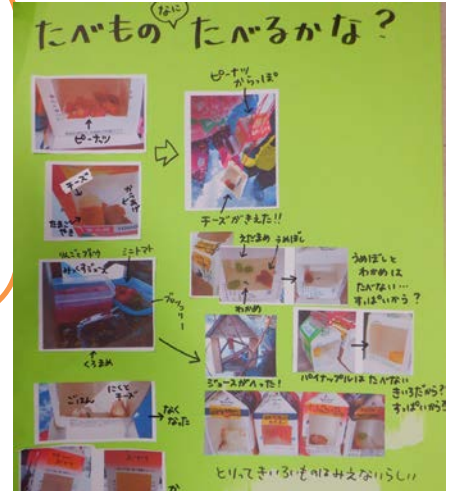
ひまわりの種が食べられている!!

2月16日(火)

『とりをよぼう』という絵本を学級で読み、絵本に載っていた牛乳パックで作った餌箱をたくさん用意した。教師も子どもも、自分のお弁当の果物やおかずを少しずつ入れて林に設置し、「今日は食べたか?」と毎日のように観察にでかけた。保護者にも声をかけるとイチゴやパン、米などを家庭から持ってくる幼児もいた。



本を真似て、ドーナツを林につけた。
「カラスに食べられなきゃいいね」と言う教師に
「いいでしょ、カラスだって鳥なんだから」



2月19日(金)

Q児「僕の全部なくなった!」

教師「先生のパイナップルは無くならなかった」

Q児「黄色いからかな?この前卵焼きも残ってたし」

R児「黄色はまぶしいんじゃない?」

教師「梅干しも食べていない」

O児「酸っぱいからじゃない?」(しばらく待つが鳥がなかなか来ない)

N児「餌に近付かない方がいいと思う」

教師「近づいたらどうしてだめなの?」

N児「人間見たら逃げちゃうんだよ」

教師「なんで?」

N児「大きいからじゃない?あとうるさいと来ないんだよ」

S児(少し離れた場所で)「これで隠れたらいい」と雪を積んで隠れる場所を作りはじめる。

教師「そろそろお弁当にしてまた後で見に来ようよ?」

S児「結局鳥も同じなんだな。…」

見ていない時に食べられていることが多いので、私たちが食べている時に鳥も食べていると思ったのだろう。

ドーナツ	○	からあげ	×
チーズ	○	たまご焼き	×
りんごとぶどう	○	くろめ	×
ごぼん	○	ハイナール	×
ぶどう	○	うめぼし	×
りんご	○	わかめ	×
こめ	○		
パン	○		
いちご	○		
ひまわり油	○		
えんまめ	○		

2月24日(水)

何度も通ううちに、鳥が餌を食べている様子にも何度も遭遇するようになった。鳥の声にも敏感になってきた。そり滑りをしている最中に鳴き声がすると「しー!静かにして!鳴いてる!あれはスズメじゃないな…。先生ヒヨコかもしれない!!」ピピピピと甲高い声が響いていた。



6月

新学期を迎え「先生鳥に餌あげよう」と言う子どもたちに「鳥も自分で餌を見付けられるようになってほしいから」と伝え餌やりを控えている。林は鬱蒼としており、鳴き声が聞こえても鳥の姿を見る事はなかなかないが、子どもたちは時折鳥の声を聞くと、「先生!鳥が来ているよ!シマエナガ(担任の好きな鳥)じゃない?」「昨日公園に珍しい鳥がいた!」など姿は見えなくても身の回りの鳥の存在を感じながら生活していることが分かった。

【この遊びのどこが楽しいんだ？】

- ・飼育物の餌やりは多くの幼児が喜ぶ。実際に置いた餌が無くなっていることに気付いた子どもたちは『餌を食べている姿を見たい』という思いを強くしたのだろう。
- ・野鳥は警戒心も強く、近づいて種類を特定できた鳥は僅かだが、『雪の上の羽は何の鳥のものか？』『何を食べるのか？』など図鑑や絵本で調べようと、新しい発見があると、教師や友達に伝えることを喜んでいった。夏の虫を捕まえては、絵本や図鑑で名前や食べる物、飼い方などを調べ、分かったことを友達や教師に知らせ楽しんできた幼児らがこの遊びに関わる姿が多く、虫捕りで楽しんできたことが鳥への関心にもつながっていると感じた。

<考察>

- ・餌箱を作った幼児がいたことを受けて牛乳パックの餌箱を教師が用意したことで、多くの幼児が鳥の食べるものに関心を寄せ楽しむことができた。そもそも野生動物への餌やりについて賛否両論あるかとは思いますが、幼児にとって関心の高い【鳥に餌をやる】という直接体験が、普段気に留めなかった鳥を気にかけて生活する姿や、「鳥も結局同じ」と自分たちの生活に重ね合わせて身近に感じることにつながった。
- ・生き物好きの〇児は進級した四月も「餌をあげたい」と教師に伝えてきたが「林に虫が増えてきたし、鳥も自分で餌を取れるようになってほしいから餌やりをお休みにしたい」と伝え餌やりを控えている。「生きていくために、心を成長させるために、たくさんの命を頂いている」ということに感謝しつつ、合わせて「自然との付き合い方を知らせる」ことも必要だと考える。その辺りのバランス感覚については、今後も園内職員で話し合う、あるいは環境リーダーさんなど専門家に学ぶなどする必要があると考える。
- ・人と自然、生き物が共存する『皆が暮す地球』であることを感じ取れるように願っていたつもりだったが、「カラスだって鳥なんだから」という柔らかく素直な感性に逆に教えられた。大人の価値観を押し付けることなく、豊かな感性を育みたいと考える。



僕たちみんな虫博士! ～偶然興味が重なったコミュニケーションの難しい子どもたち～

<教師の願い・意図的な関わり・環境  夢中になる幼児の姿（年中 4 歳 T 児・U 児・V 児）>

<抽出児の紹介>

この事例では、令和 3 年度 4 月に入園した T 児、進級した U 児と V 児の 3 人の 4 歳児にスポットを当てている。3 人それぞれ、自分の思いが強く、物の共有が難しいため、学級の友達と関わりとトラブルになることが多い。また、学級活動では周りの刺激に反応して落ち着かない反面、面白いと感じたことにピンポイントで焦点を合わせて向かっていくので集団から逸脱したり、自分の世界に入ったりしがちである。人との関わりにサポートが必要な 3 人だが、今回、興味のある遊びが偶然重なることで思わぬ展開となる。

T 児:初めての場所や人への不安や警戒心が強く、他の幼児が接近してくると唸ったり、掴みかかったりするが、担当教師と戸外に出て他の幼児と距離をとりながら虫探しができるようになる。

U 児:疑問に思ったことを、「どうして?」と、素直に教師に尋ねる知りたがり屋さんであるが、自分の思いを通そうと頑張りすぎるため、友達とうまく関われずにいた。

V 児:蜘蛛を「スパイダー!」と呼び、怖いながらも集めていた。大人のことも子どものことも大好きで関わろうとするが、自分の気持ちを言葉で伝えることが難しく、教師が仲介して遊んでいた。

始まりは雨の日、ミミズ祭り? 【2021 年 4 月 19 日】

T 児は、ミミズが大好き。小雨が降る朝、登園早々、T 児は「先生、幼稚園に来る時、ミミズ見付けた!」と、喜んで話す。園内は他の幼児の遊びの場が集中しているので、心穏やかに過ごすため教師と T 児はカッパを着て園庭に出る。そこで、想像を越えるミミズの大群に遭遇。T 児「先生、ミミズがいっぱいだ!なんで?」「白いミミズ死んでる?なんで?」「きっと、水が好きだから集まったんだ!ミミズ祭りだ」と T 児は大喜びで生きているミミズをたくさん飼育ケースに入れ、死んだミミズを教師に渡す。T 児に命の概念はまだないが、教師はひたすらお墓を作り、いつか命に気付いていくための布石をつくることにする。



伝説のワラジムシ 【4 月 21 日】

園に隣接する林で、年長組の虫好き男児たちが、緑色のダンゴムシを『レア!』と呼んでいることを知っている U 児。最初からレア狙いで倒木をひっくり返したり、皮を剥がしたりしていくと、密状態のワラジムシとダンゴムシを発見!さらにじっくり探すと赤っぽい色素の薄いワラジムシがいて、早速確保。U 児「これ!伝説のワラジムシだ!!!」周りの友達も「見せて!見せて!」の大騒ぎ。その日から赤、青、緑など変わった色のワラジムシやダンゴムシたちは「伝説の～」、「幻の～」と、スペシャルな呼称で呼ばれるようになる。



こんにちは、虫博士ニュースの時間です 【4 月 23 日】

U 児は絵を描いたり、説明したりするのが苦手であるが、捕まえた赤い伝説のワラジムシを学級の友達に知らせたいと思っている。教師は、U 児が学級の友達に認められる経験をさせたいと思っていたので、担任と相談し、U 児に「タブレットで発表してはどうか」と提案する。U 児はまだ、学級の誰も使ったことのないタブレットで発表をすることに乗り気になる。そして、学級の友達の前で、堂々とタッチパネルを操作し、伝説のワラジムシの足や目などを拡大して友達に見せる。発表は大成功。U 児はこの日、『虫博士』と友達から呼ばれたことが本当に嬉しかったようだ。



タブレットとテレビを活用し、やる気 UP!

白熱！ミミズ相撲 【4月28日～5月11日】

地を這う生き物から、土の中にいる生き物に興味が広がっていき、雨の日も風の日も、T児とU児は林の入り口の泥場を掘り、ミミズやコガネムシの幼虫を捕まえている。T児は虫博士のU児のことを認めていて、ミミズの争奪で揉めることはあっても、同じ場にいることは許せるようである。ミミズや虫を探す子どもたちがすぐ道具を使えるよう林の入り口にリールを置き、道具を常設すると、置き場として使うだけではなく、ミミズや幼虫を集める子どもが集合するようになる。(図1)は、自分たちが捕まえた自慢のミミズや幼虫を土俵で対戦させているところ。動く様子が楽しいようである。

それまで『スパイダー』にしか興味がなかったV児が、ミミズや幼虫の動く様子の面白さに惹かれ、気が付くと虫探しに加わるようになっていた。教師と1対1で遊んでいたT児とU児とV児だが、この日から『虫博士トリオ』として集まるようになる。

毎日、土を掘っているので、プラスチック製の長いスコップでの操作も上達する。土が硬過ぎる部分は教師が鉄スコップで亀裂を入れる手伝いをする。段々、草の下や柔らかい土の下を掘るとミミズがいることに気付いていく。

U児「先生、ここ(鉄スコップで)割って！絶対ミミズいるから！」と、断言。さらに、掘った穴の中の『側面に横穴』が空いていると、U児「この中にミミズ、絶対いる！」と、自分たちで横穴を目掛けて掘り、ミミズを捕まえている。

ミミズと幼虫探しの場では、3人それぞれの『つぶやき』にいつの間にかみんなが耳を傾けるようになってきて、更にそのことについて自分なりの思いを伝えようとする姿も見られるようになり、教師は、大変驚いた。『札幌の昆虫』という地域の昆虫と幼虫が載った図鑑を広げ、捕まえたものが何処に載っているかを調べている(図2)。文字は読めないが図鑑の写真と現物を並べて比べているので、大きさ、色、形が見比べやすく、共感を生むようである。

アリの巣を掘り当てた 【5月13日】

草の下を掘ったら、たくさんのアリが出てきてびっくり。教師が白いものは卵だと伝え、3人はアリが卵を運ぶことに疑問をもつ。教師「卵は大事なものだから、卵の部屋にあるの。今、私たちが卵の部屋を壊しちゃったから、アリは卵を安全なところに隠したいの。」V児「どこに？」

もっと土を掘り進めると干からびた幼虫が出てくる。

教師「アリの餌の部屋を掘っちゃったかな」

U児「知ってる。ムシ、食べるんでしょ」

V児「ええっ、かわいそう」

T児「他に何の部屋がある？」

教師「女王アリの部屋があるかな」

U児「知ってる。女王アリって冠かぶっているんでしょ！冠かぶっているアリを見つけたらいいしょ」

U児には、冠をかぶった女王アリのイメージがあるようなので、教師はしばらく、U児のイメージを大事にし、様子を見守ることにする。

アリの巣を掘り、出てきた幼虫を見付けては、「幼虫、助けた」「アリに食べられるところだった」と、幼虫を救出した気分になる。U児は掘った巣穴の側にいくつも巣穴の入り口があることに気付く。

U児「先生、ここにもアリの巣ある。先生、(巣穴を)つなげて」

U児は漠然とだが、巣穴に秘密があるような予感がし、自分で確かめたいのだろう。(この後、U児は、アリの巣穴の入り口はいくつもあり、つながっていることに気付いていった。



自由にすぐ使えるよう道具をリールの上に常設！井戸端会議もできる！



幼虫VSミミズ

図1



この幼虫は何だ会議

違う！

図2



クロオオアリ



アリ、大きい！

力を合わせてアリの巣を掘る 【5月14日】

U児とT児が朝から、アリの巣を掘り、女王アリ探しをする。自分たちで冠をかぶった女王アリを見付けたい気持ちがある。

虫博士トリオの関係性も変わってきて、当初はそれぞれが自分の飼育ケースに自分の虫を入れることに専念していたのだが、今は、『女王アリ探し』という同じ目的をもつ友達を意識し、初めて協力する姿が見られる。

固い土を交互に掘ったり、スコップを重ね合わせ、「2つスコップ」と言って一緒に掘ったり、相手の呼びかけに応じて駆け寄ったりするなど、虫博士トリオが力を合わせ始める。



交互に掘る



必殺！2つ
スコップ

女王アリの姿と形 【5月18日】

女王アリを探し続けて4日目（合計7時間以上掘り続けている）。ここまで頑張っている姿を見ると、教師も何とか本物の女王アリを見付けさせたいと願い、ネットで探した女王アリの実物写真を見せる。

U児「・・・冠、付けてない」

T児「おっきい！」

教師：「女王アリは卵を産むから、お尻も大きいよ！」

女王アリのイメージをもった子どもたちは、『大きい』ということを目印に探すようになる。途中、ムネアカオオアリを見て、V児が「女王アリだ！」と言っていたが、近くを通った年長組の子から、「それは違うよ。」と教えてもらう。アリにも種類があることに気付いていく。

また、教師が女王アリの見付け方をこっそり調べたところ、卵の部屋からそれ程遠くを探さなくてもいいことや、巣の規模、土質、脱翅痕（羽を落とした跡）の有無など、手掛かりになりそうなことがあったので、子どもたちが気付けるように促すことにする。



検討中

これかな

違うんじゃない

兵隊アリ出現？出るかラスボス！女王アリ！【5月20日】

女王アリ探しも6日目。以前掘った場所に、またアリの巣ができていることに気が付き、虫博士トリオで掘り始める。今までの経験で、『横穴には何かいる』ということが分かっているので、横穴を見付けては掘り進める。すると、横穴から大量のアリが顔を出していることにU児が気付く（図3）。

U児「兵隊アリがいっぱい！女王アリは兵隊アリに守られているから！」

今までにない予感と手応えを感じたのか、3人のスコップさばきにも力が入る。すると、アリの塊の中から、明らかに大きい一匹を発見！

（図4）

T児とU児とV児「女王アリだ！！！！」

今まで協力していた3人も、この時ばかりは、自分の女王アリだ！自分がもらう！と揉めて、取っ組み合いの喧嘩になり、最後は大泣きする。教師が『3人のもの』ということで折り合いを付けようとしたが、3人とも腑に落ちないようである。それだけ、6日間、頑張ってきた思いが強かったのである。

3人が女王アリを捕まえたことは、虫ニュースで周りの幼児に知れ渡り、3人も十分満足して、違う虫を探し始めた。



図3



図4

女王アリ

後日談

女王アリを見つけた経験は、3人にとって貴重な体験だったようだ。6月に入り、T児がアリの巣を掘って、幼虫①と繭②と蛹（繭の中）③を見付け、U児とV児に見せていた。（図5、図6）は、『ありこちゃんのおてつだい』の絵本に出てくる巣穴の場面で自分たちが見たことと照らし合わせ、話をしている。共通する体験をした仲間だからこそ、分かり合える話であり、伝え合って楽しいのである。

今ではエゾスジクロチョウ、キアゲハ、スジクワガタ、コクワガタなど、捕まえられる虫が増え、虫博士たちの見せ合いや話し合いが白熱し続けている。（図7）

「虫捕りをして育った力」

1. いろいろな虫がいることを知り、虫と遊ぶことで習性に気付くようになる。
2. 虫網などの操作が上達し、虫の動きが追える動体視力が付いてきている。
3. いろいろな虫眼鏡を試しながら、虫を観るのに使いやすい物を選ぶようになる。
4. 調べた物は虫ニュース（図8）として、園の皆に見えるよう掲示することで、周りの友達や家族に認められ、自己肯定感が高まってきている。
5. 虫好きの仲間ができ、仲間と虫探しをする楽しさを感じる。



図8



図5

この順番だよ。

卵から幼虫の部屋に行く



図6

コクワガタのオス、見る？



図7

今日の成果を見せ合う2人

<園内での話し合い・考察>

T児について

- ・とにかくT児は、虫探しに夢中になっている。見つける楽しさ。そこにいる仲間は、受け入れられるようになってきている。学級の中でもT児の好きなことや得意なことを友達が知っている。教師がとことん子どもたちに向き合ったからこそその成長が見られる。
- ・T児は入園前、園内に入ることを嫌がっていたが、今では「寝ないと幼稚園に行けないよ」と言うのと「やだ！絶対に行く！」と答えるくらい幼稚園が大好きで安心できる場になったT児の成長も興味にと母が喜んで話してくれました。T児の成長も興味にじっくり向き合えたからこそである。

U児について

- ・U児は、伝説のワラジムシの発表で『虫博士』と呼ばれ、認められたことが、自己肯定感を高めたのだろう。発表後、「虫のことは虫博士のU児に聞こう」と学級の友達や年長組の虫好きの男児たちに声を掛けられ、園内の虫探しの主要メンバーとなっている。また、学級で必要とされている自分を感じられたことで、学級活動からの逸脱が減り、参加することが増えている。

V児について

- ・遊びの場を転々としていたV児が、毎日女王アリ探しに夢中になれたのは、林の広い空間で、自分の居場所が保障され、興味のあることを同じように楽しむ友達がいたことが大きな要因である。

- ・V児が蜘蛛好きなのが学級の友達にも伝わり、友達が蜘蛛を見付けると「V児に知らせなきゃ！」と声を掛けられるようになる。大好きなことをじっくり取り組める居場所をつくるのが大事である。

3人組だからこそ

- ・1つのことにフォーカスできる3人だったからこそ、女王アリを見付ける目的を達成できた。
- ・『女王アリ』というキーワードが、より明確に共通の目的をもつことに繋がった。1つのことから湧き出てくる面白さがあるのが、保育ならではの点。
- ・教師が一人ひとりの『好き』を認め、とことん好きなことに付き合うことで、3人が偶然つながり、3人の自己主張が薄れ、教師を通して3人が重なり合う相乗効果、教師という核、同じ興味と環境があり、自分の深まりだけではなく、友達と共有できるところがあった。共有が面白いと感じられたことが、3人にとって大きな成長であった。

教師の援助について

- ・『冠を付けた女王アリ』のイメージに対し、必ずしも正解を求めることが大事なわけではないが、『女王アリは冠をつけていないこと』を知らせたことは、3人の目的を明確にもつためのいいきっかけになった。
- ・教師の専門性、虫に関する知識がより子どもたちの興味を引き付けた。教師が言ったことに「そうだな」と共感でき、友達同士『共有すること』が面白いものになった。
- ・自然の中には、不思議な予感や気付き、出会いがいっぱいある。子どもたちの感じたことが漠然としていたとしても、そのためにとった行動が大人から見て遠回りであったとしても、子どもたち自らが動き、考えを巡らすことを十分に保障することが後々の成長につながっている。
- ・子どもたちの思いの実現とはいえ、生命尊重を考えるにあたり、アリのコロニーを壊して女王アリを見付けることはどうかと葛藤はあったが、子どもの学びのために感謝して命をいただくと考えた。『命』自体まだ分からない幼児だとしても、捕まえた虫が動かなくなることは分かる。残酷かもしれない。それでも、虫捕りをするすることで、虫に触れる直接体験を通し、虫に対して愛着が生まれ、命を感じる大切なきっかけとなっていく。また、子どもは虫と遊ぶからこそ習性が分かり、生き物の世界を垣間見る。映像などで、得た知識もいいが、直接体験で得た学びは感動が違う。林に入って自然の中に身を置き、虫の営みを観察することで興味、学び、愛情がもてることを子どもたちの成長から感じ取ることができた。

『自分の好きなことがある。居場所がある。そこにいけば楽しいことがある。一緒に楽しめる仲間がいる。』
 ということが、幼児期の成長に必要である。』



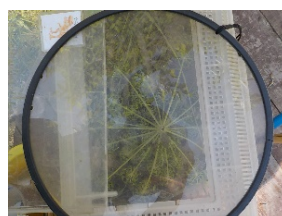
虫眼鏡の倍率は変わらないが、上の方が見える範囲が広く、プラスチック製なので首からかけられ、安全。



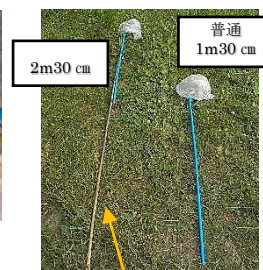
捕まえた虫が光の反射でくっきり見える拡大鏡。



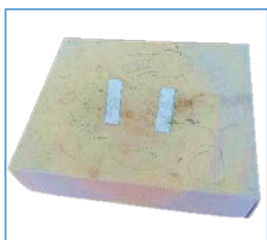
捕まえた虫が生きのまま入れて見やすい拡大鏡。



広域を低倍率で拡大するレンズ。レンズの用途が幼児にも分かりやすい。



T児とU児考案。高い所にいる虫を捕まえるため、柄を長くした虫網。重くてコツがいる。



お菓子の箱で作ったミミズや幼虫の土儀。



ミミズ、ナメクジ、カタツムリ用霧吹き。クモの巣にかけるとキラキラ光るのが密かなブーム。



捕まえた虫の名前など、ビニールテープや木片に書く道具。



札幌市に生息する昆虫やその幼虫が載っている子どもたちにとってバイブル的な図鑑。



T児専用の赤いティラノサウルスマークが付いた飼育ケース。自分や他の幼児にT児の所有物だと分かるようにすることでT児が安心して遊ぶことができる。

子どもたちが自由に使う道具

V. 今後に向けて

今年度実践事例として取り上げた『冬の遊び』のエピソードは雪国に暮す者にとっては特に目新しさは無いだろう。しかし、「冬の遊びの中に潜む教師の援助や環境構成が何なのか？」それぞれの幼児が感じている「冬の遊びの何が楽しいのか？」を改めて話し合うことで、発達に応じた援助や環境のポイントや、様々な冬の遊びの中にある深い学びが見えてきた。

最後の「アリ」の事例からは、個性豊かな3人の安心安全な園生活と彼らの夢中になって遊ぶ生活を願い、3人の興味関心を全力で支える教師の関わりが、結果としてその3人の関係性を深め、自己肯定感を育むことにつながっていった。一人一人の『好き』を教師も一緒になって全力で追求する先に、『主体的・対話的で深い学び』があることを確認することができた。

結論として、今年度のここまでの事例研究を通して分かったことは、どれも、直接関わらなければわからなかったことがたくさんあるということだ。鳥に餌を与え続けたいという思いにどう答えるのか？そもそも餌やり自体反対の意見もあるだろう。また、結果としてアリの巣を破壊してしまっていることについても、命を大切にするという点でどうなのか？という意見もあろう。しかし、直接体験・ホンモノ体験が子どもたちの心を豊かに育むことのメリットの大きさを思う時、たくさんの命を頂きながら生きている私たちは、『感謝』の心を忘れずに子どもたちの夢中になって遊ぶ生活を支えたいと心から願わずにはいられない。映像だけでは得ることのできない深い学びが直接体験・ホンモノ体験の中にあるということを踏まえ、子どもたちの暮らす環境を作る必要がある。それこそが『科学する心を育む環境』となるからだ。

また、それらの体験が誰かにやらされたものではなく、幼児の内的動機から主体的に関わっているということが、より学びを深める時に重要であることは言うまでもない。であるならば、1人1人の「やりたいこと」(興味関心)はどこにあるのか？何を楽しんでいるのか？をその場で即座に的確にとらえ応じていく力や、保育中あるいは保育後にその状況を共有し多角的に幼児の思いや願いをとらえ次の環境構成につなぐ教師の同僚性が重要である。「夢中になって遊ぶ」ことのできる環境は、そうした幼児理解の上にこそあるのだと確信した。

今年の春、年長児の栽培の相談で「ピザが食べたい」というので「ピザを作るために何を育てたいか？」と問うと、「トマト」「ピーマン」の他「僕のお父さんは小麦粉でピザを作る」という意見から、小麦を育てたいという意見が出された。春小麦の種を探し、農協から種を譲り受け、本園で初めて「小麦」を栽培することとなった。農協の方に zoom で育て方を教えていただき栽培した。つい先日収穫した麦の穂を手に取り、おもむろに皮を剥いた。「先生ダメだった!種に戻っちゃった!またあのおじさんに聞いてみる?」…さてこれからどうやってピザになるのか?楽しみな担任である。幼児の興味関心に寄り添う保育をしていると、どんどん暮らしが面白くなっていく。小麦を育てても小麦粉にはならない…と知った子どもたちと共に問題を解決していくつもりである。そうすることによって更に深く知ることの面白さに出会えると考えからだ。

最後に…令和7年の3月、札幌市立手稲中央幼稚園は閉園することが決まっている。札幌市立の幼稚園は17園から10園に、そして今度は10園から5園にと再編される。教員である私たちにそれを止める力はなく、無力感しかない。しかし、保育は文化である。諸先輩方から受け継いできた保育が、教師と子どもたちの日々の営みが、次の年の幼稚園生活へと引き継がれて、深い学びが生まれる環境となっているのだとこの研究を通して確信している。この火を絶やしたくない。そのためには、研究を発信するしかないという思いでいる。最後の日まで諦めず、ここでしかできない保育を追求し、子どもたちの笑顔あふれる日々をここ札幌市立手稲中央幼稚園で創りたいと思っている。

研究部長 川角 清美

VI. おわりに

論文中にもあるように、本園では3年間にわたり「やってみないと分からない！心と体で感じよう！」を主題に研究を進めてきた。

副主題のキーワードを『夢中になって遊ぶ！』とし、“教師の役割”“環境との出会い”と研究を進めてきた。

その中で、幼児が遊びを楽しみ、夢中になって遊ぶ為には、幼児の遊びを肯定的に受け止め、共に楽しもうとする教師の姿勢が最も重要であることが確認された。

幼児のつぶやきをしっかりと受け止め、一緒になって試行錯誤したり、時には幼児に教えられたりしながら遊びを進めていく時、幼児は安心して自分の思い、考えを表し、じっくりと遊びを楽しんでいく。一人一人の遊びが充実していくと、水面に波紋が広がるかのように興味関心が広がり、交わり、重なり合って、遊びがどんどん楽しくなっていく。

幼児は、夢中になって遊ぶことで「もっとやってみたい！」「もっと知りたい！」「もっと続けたい！」と、どんどん意欲的になり、『ワクワク』が広がって行く。

幼児にとって自分のやりたいことを思う存分に楽しむことができるということは、幼稚園教育要領にある『生きる喜びを味わう』ということそのものであると思う。

教師たちはその『ワクワク』を幼児の表情、態度、言葉から読み取り、幼児の心を感じたいと願う。『本当に子どもたちの心を感じ取れているのか？』そんな思いから3年目の研究が始まった。

『どこが楽しいんだ！何に夢中になっているんだ？』と幼児の遊びを見ていると、楽しい遊びを通して幼児の心が解放されていくのが分かる。そして幼稚園の生活は幼児にとってかけがえのない豊かな世界となる。その中で幼児は多くのことを学ぶ。対象に関する興味関心はもとより試行錯誤すること、あきらめないこと、友達と力を合わせること・・・等

ロバート・フルガムは「人生に必要な知恵は全て幼稚園の砂場で学んだ。」と言ったが、これからの予測不能な社会を生き抜く非認知能力を育む、生きる力の基礎となる生きる喜びは「幼稚園の楽しい遊びで学ぶ。」と言いたい。それが遊びを通して学ぶ幼児期の教育の在り方であり、幼児を育てるということだと思う。そして幼児の心に寄り添い、一人一人の思いを大切にすることこそが、遊びを支える教師の努めである。

私たちはいつも幼児の心に敏感に『何が楽しいんだ？』と問い続ける者でありたいと思う。その問いをやめてしまったら、幼児の中に育とうとしている『主体的・対話的で深い学び』を見取る『遊びを中心とした保育』は不可能になると思うから。

園長 氷見 登弓

札幌市立手稲中央幼稚園

研究代表 園長 氷見 登弓 研究部長 川角 清美

研究同人 堀 美枝 宮崎 由美 桜庭 明子 佐々木 洋美 今 つち子 竹本 恵子

平間 沙季 仙石 えり 吉田 真緒 糊沢 美奈登 佐藤 久美